

43089

教科書文庫

4

8/0

32-1940

2000.0

25718

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

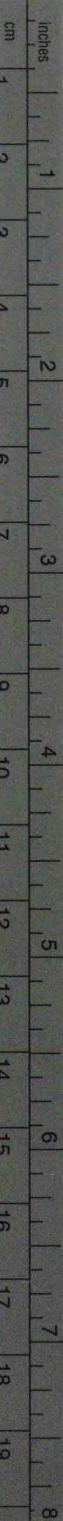


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.0  
Mo4  
資料室

高等小學讀本 卷四

文部省



資料室

395.9

M1014

石島縣

高等小學讀本 卷四

文部省







目録

第一課	讀書	一	第十六課	ボアソナード君の歸國を送る詞	七十六
第二課	干潟の舟	六	第十七課	法律及び命令	七十九
第三課	すゝき原	九	第十八課	道徳と法律	八十二
第四課	義蟲	十	第十九課	田園の自然	八十六
第五課	渡り鳥	十四	第二十課	我が家	八十八
第六課	伊藤博文	二十一	第二十一課	春を待つ歌	九十四
第七課	國寶	二十八	第二十二課	世界の航路	九十六
第八課	萬里の長城	三十一	第二十三課	手紙の認め方	百三
第九課	東西雜話	三十四	第二十四課	畫師の苦心	百七
第十課	元寇の防壘	四十一	第二十五課	ローマの舊都	百十一
第十一課	ハワイ通信	四十三	第二十六課	大樹	百十九
第十二課	柳生宗矩	五十三	第二十七課	關稅	百二十三
第十三課	雪	五十八	第二十八課	曾國藩	百二十六
第十四課	賢母の教	六十二	第二十九課	峠の茶屋	百三十
第十五課	詠史十首	七十三	第三十課	國語と愛國心	百三十七

高等小學讀本 卷四

第一課 讀書

我等は何のために學校に學ぶか。いふまでもなく、**智能**を啓發し、**徳器**を成就するがためである。然らば學校を卒業すれば、我等の**智徳**は十分であるか。否々、學問には際限がない。學校で學ぶ知識は九牛の一毛にも過ぎない。至善至徳の域に達するのは、**畢生**の力を盡くしても及び難い。學校は**智徳**の基礎を造る處に過ぎないから、我等は一生を通じて修養に力め、其の大成を期せねばならぬ。





若し學校を卒業しただけで、更に進んで自己の修養に志をなければ、將來の進歩は望まれないのみならず、折角學校で築いた基礎までもうちこはして、<sup>可惜</sup>あたら多年の修業をむだにしてしまふ。學校を卒業してそれぐの職業に就いて後も、常に學校に在る時と同じ心持で、絶えず自己の智徳を進めようと力めて行く人にして、始めてりつばな國民となり得られるのである。それこそ學校にはいつた目的にもかなふし、國家が學校を建てた趣旨にも合するのである。

社會に出て實務に當れば、學校で學んだだけでは足りないことを悟る場合もあらうし、又學校では全く學ば

なかつた事柄に出會ふ場合も多いに相違ない。世には實世間・活社會に入れば、實世間・活社會が即ち種々の事柄を教へてくれると言ふ人もある。これも一應もつともなことではあるが、何時も世間からの教を待つばかりでは不十分である。他の教を待たず、常に自ら進んで自己を教育する覺悟がなくてはならぬ。學校で接觸した師友が何時も傍に來て注意や指導をしてくれるものではないから、先生や友人と同様に依頼することの出来る忠告者を求める必要がある。それは何かと言へば、書物である。書物は我等の修養を助ける大切な師友である。



讀書を少數の學者の仕事と思つた時代は既に過ぎた。今は國民一般が讀書によつて各自の智徳を磨くべき時代である。身分職業の如何にか、はらず、學校で得た讀書力を活用して、常に自己の業務に關する知識を進め、自己の品性を高め、趣味を高尙にすることが必要である。必ずしも程度の高い書物を讀めといふのではない。それぐの業務嗜好に應じて適當な書物を讀む中には、必ず何等かの修養を積み、いくばくかの利益を受けるのである。

高讀四

し取つて勉強したといふやうな話がいくらもある。今はどんな田舎でも、大抵の書物は得られぬことはない。又忙しくて讀書の暇がないといふ人も往々あるが、心掛一つで、毎日いくらかの時間を讀書のために割くことは、むづかしい事ではない。本居宣長のぶながにも、

をりぐに遊ぶいとまはある人の

いとまなしとてふみ讀まぬかな

と詠じた歌がある。

こゝに甲乙の二國があつて、甲國の國民の大多數は争うて自己教育のために讀書するのに引きかへ、乙國の國民は何等讀書に興味を有しないとすれば、兩國の國



民の將來に於て、どれだけの差が生ずるであらうか。さればこそ今日文明國に於ては、到る處に各種の圖書館を設立し、國民に讀書の便宜を與へることを競つてゐるのである。

第二課 干潟の舟

風に逆らひて舟をやるには、間切るといふ工夫もあり、流に逆らひて舟を進むるには、押切るといふ意地もある。唯春の日の潮のそこりて、遠淺の海の悉く干潟となりたる時のみは、意地にも工夫にも舟を操らん道なく、あだに心の煎らるゝものなり。曾て此の事を言出でて、然る折にも何とか爲すべき手

段ありや」と、老いて物事に巧者なる舟人に問ひけるに、舟人うち笑ひて、何時にても纜こらを解かんとすれば、何時にても水ある處に舟を繋ぐべし。我等は繋ぐ時に解くことを思ひて繋ぎ、解く時に繋ぐことを思ひて解く。素人は繋ぐ時は解くことを思はず、解く時は繋ぐことを思はず。こゝを以て歸らんとして歸る能はず、進まんとして進む能はず、徒に心を干潟にあせるやうの事もあるに至るなり。若し既に干潟に居坐りたる舟となりたらんには、我等なりとて、其の場に臨みて何の手段のあるべき。たゞ少しは早くとも、心のどかに食事など濟ませて、さてやがて立働かん折、足もつれのせぬやうに、舟



の中を取片附け、尙それにても時餘らば、舟道具を丁寧  
 に檢め繕ひなどして、時と潮とを待つべし。潮を待つは  
 愚しけれども、潮を待たぬよりは賢きわざなり。何時か  
 一度は爲さでかなはぬ事を爲しつゝ、待たば必ず來べ  
 き潮を待つに、大抵其の事は爲し果つるにも至らで、潮  
 ははや忽ちにして來るものなり。何時か一度爲さでか  
 なはぬ事は、小さき舟の中につきてもいと多きものな  
 れば、潮待つ間に爲すべき事のなしといふはなし。潮待  
 つ間に爲すべき事あるを見出して之を爲さば、たゞ時  
 の足らざるを覺ゆるのみにて、更に心の煎らるゝこと  
 などあるべくもなし。といひけり。おもしろき言葉なり

高談四

と思ひしかば、今に忘れず。(幸田成行「潮待ち草」ニ據ル)

第三課 すゝき原

一

雲かゝる

高嶺より

吹下す

秋風に

果もなく

なびきわたりて、

波なせる

はなすゝき。

二

一筋の

中みちを

稀に行く

人と馬

沖へ漕ぐ

小舟の如く



見る中に

かくろひつ。

三

霧たてば

風絶えて、

日はかげり、

山見えず。

ほのじろく

たゞほのじろく

海をせる

すゝき原。

第四課 蓑 蟲

我が國の歌人は、秋風の吹來る頃となれば、蓑蟲が「ちゝちゝ」又は「父戀し」となくと思つてゐる。實際此の蟲が鳴いたら、秋の寂しさに一種の詩味を添へるであらうが、あやにく蓑蟲には何等の發音器もない。木の葉や皮を

高讀四

かむ音をマイクロフォンで聴取つたら、或は「ちゝちゝ」と聞えることもあらうけれども、通常我々の耳には聞えるものでない。故に多分想像に富んだ歌人が、他の蟲の鳴くのを蓑蟲と聞誤つたものであらう。これは「みゝずをうたひめ」などと呼んで、夏の夜「じい〜」と鳴くやうに思つてゐるが、鳴いてゐる處を掘つてみると、意外にもおけらが飛出す、それと同じことである。

蓑蟲は蛾の幼蟲で、我が國に凡そ七種居る。此の蟲は自分のすみかとして、口から絲を吐き、木の葉や皮又は小枝を綴り合はせて袋をこしらへる。さうして木の枝などにくつついてゐる。此の袋の内面は、絹で裏打したや



うに滑らかになつてゐる。外見が蓑のやうなもので、蓑蟲といふ。此の袋の構造も、種類によつてそれと違つてゐる。木の枝を縦に並べたもの、横にしたもの、螺旋状にしたもの、木の葉を集めたもの、木の皮を綴つたものなど、いろいろある。しかし總べての袋に共通な性質は、其のすみかの近傍にある物にまねて、鳥などの目を欺くやうにしてあることである。即ち擬態の好い例として、生物學上有名なものになつてゐるのである。

此の袋を開いて見ると、中に居るのは、いも蟲かしやくとり蟲を短くしたやうな、太つた小さい蟲である。頭と胸は黒く、堅く、腹は軟かて灰黄色、胸部には三對の脚、腹

部には五對の脚がある。疑もなくこれ蛾の幼蟲である。此の幼蟲は、袋の中で蛹まごとなる。此の蛹は袋のさきを破つて半分ばかり出て、蛾になつて飛出すのであるが、それは皆雄である。其の蛾を、みのがといふ。通常羽を広げた大きさは六七分の黒い蛾である。

雌は一生を袋の中に暮して、一種隱遁かくれ的の生活をする。飛ぶ必要がないから、羽もなく、又食物を取る必要もないから、口も極めて不完全である。雌は數百の卵を自分のすみかとする袋の中に産み、やせ衰へて死んでしまふ。卵は翌年の夏の初はつつて幼蟲となる。(谷津直秀趣味の動物ニ據ル)



第五課 渡り鳥

私たちが七つ八つの頃  
には、そろく、秋が更け  
て来ると、晴れきつた空  
を毎日のやうに雁が渡

つた。私たちはそれを見かけると、吹き  
さらしの野路に立つて、空の一方を  
仰ぎながら、雁よ、竿になれ。竿になつ

たら、鉤になれ。と、其の長い行列が、漸次に雲  
の中に、じみ込んでしまふまで、聲をから  
して叫んだものだ。が、今では雁も少くなつ

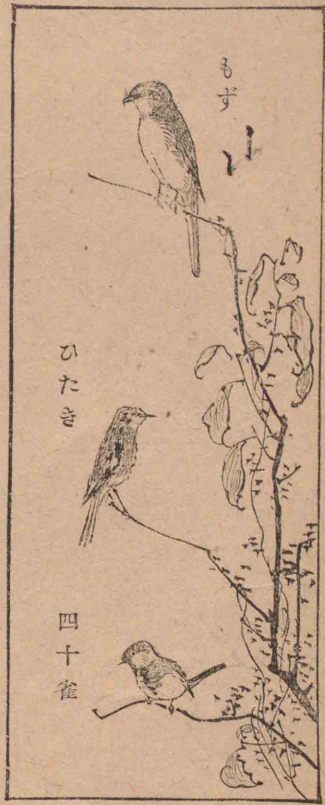


雁

高識四

て、晝間其の長い列が空を渡ること、は、よくく、人氣遠  
い野原か何處かでないと、めつたに見られなくなつた。  
其の頃は又うちの後の岡に行つてみると、葉の落ちか  
かつた雑木林に、小鳥がたくさん来てゐたものだ。  
秋の彼岸が過ぎて、そろく、日影が黄色がかつて来よ  
うといふ頃、私たちは、どうかすると、暖い日の午過、そこ  
らの木立で、甲高い鋭いもずの聲を聞くことがある。あ  
あ、もう秋だな。と思はず、振返つて見ると、小さな櫟にま  
じつて、づぬけて背の高い榆の木にもずが一羽止つて、  
黄いろい夕日を受けて、羽莖が金のやうにきら／＼し  
てゐるのが見える。私たちは其の瞬間、言ひやうのない





強い健かな氣持が  
胸に流れるのを覺  
える。

る。山家の午過ものうさうなこほろぎの聲も何時の間  
にか止んで枯葉一つ寝返を打つ音までがはつきりと  
耳に入る静けさの底に何處からともなく微かな聲が  
漏れて来る。すると木陰の萑こ畠か何處かで餘念もなく  
せつせと仕事に精出してゐた農夫がひよいと顔を上  
げる。其の拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうに、小  
鳥がついと身をそらして逃げていつてしまふ。それが

高讀四

ひたきだ。

此の鳥は、まるで悲哀を懐いてゐる人のやうに、大抵は  
連に離れて唯ひとり出て来る。さうしてそこらの小  
枝に止ると、ひよくりくと軽いお辭儀をして、さ、や  
くやうな聲で歌ひ出す。

ひたきが来て、ものの十日とた、ぬ間に、四十雀が来る。  
此の鳥はひたきと違つて、十羽も二十羽も群をなして  
来る。山から里へ移る折などには、まるで時雨でも降る  
やうに、細かい羽音がさつと空をかすめて聞える。さう  
してそこらの木立に下りるとすぐに、めまぐるしい程  
すばしこくそこらをつ、き廻しながら、鼠色の背をそ



らし、柔かみのあるまるい胸を見せて、銀の鈴を振るやうな透きとほつた聲で、早口にしゃべり続ける。斯うした大きな群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない灰色のうぶ毛そのまゝの雛がまじつてゐて、どうかすると高い枝に止り損ねて、もんどり打つて宙返することもあるが、そこはまたなれたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で木はだのひびをついたりする。

小雪がちらつく頃になると、みそさといが来る。これはひたきと同じやうに、大抵ひとりぼつちで、それもこつそりと附近を忍ぶやうにして来る。冬の初の午過、山近

高讀四

い田舎の小家で、ぢいさんは火燧にもぐり込んでこくりくと居眠をする。其の側ではあさんあさんはせつせと絲車を繰つてゐる。すゝけた障子に、軒につるした干菜の影がみすぼらしくうつつて、時折小鳥の影がちらついたりする。どうかして絲目が切れて、眠さうな錘つゐの音がばつたり止むと、こそくと掛菜をむしる音がするが、老人の耳にそんな音の聴取れようはずはない。ばあさんはう





つむいたまゝ、また絲を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、びよびよくと小刻みに垣根を傳はつて、隣から隣へと狭苦しい物陰を出たりはいつたりして移つて行くのだ。みそささいと後先になつてほゞじろが来る。冷たい雨のびしよくと降る中を、獨者のほゞじろが灰色の胸までぐしよぬれになつて、しよんぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の郷里で此の鳥の鳴聲を解いて、

一筆啓上仕る。

子供泣かすな、火の用心。

今度の便に金十兩、

やりたいけれど、一文も御座なく候。

と言傳へてゐるのを思ひ出す。

後の雑木林にこんな小鳥が来る頃になると、野にはもうそろそろうづらが來、しぎが來てゐる。(薄田淳介「泣菫文集」)

ニ、據ル

第六課 伊藤博文

天保十二年九月二日、周防國熊毛郡束荷村の農家に呱呱の聲を擧げたる一男兒は、即ち他日明治の功臣として衆望を一身に集めたる従一位大勳位公爵伊藤博文其人なり。天の將に大任をこの人に降さんとするや、



必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞せしむ。と。博文家貧なり。幼にして父母に従ひて萩に出て、諸家に雇はれて具に艱苦を嘗む。藩士來原良藏其の資性の穎敏なるを見て、訓育最も力め、勸めて吉田松陰に學ばしめ、後之を木戸孝允にすゝむ。孝允一見其の奇才を愛して、東奔西走國事に勤むるの際、常に博文を伴ひて參畫せしめ



たる所多し。

博文年二十三、海外の事情を審にせんと欲し、井上馨等

と相謀り、萬難を排して密かにイギリスに航せり。此の時長州藩にては、下關海峽を通過せる外國船を砲撃すること數回、各國聯合して其の罪を問はんとす。博文イギリスに在り、新聞を讀みて之を知り、馨と共に倉皇歸國し、直ちに各國公使に懇請して猶豫を求め、藩主に向つて具に攘夷の行ふべからざるを説き、辯論甚だ力む。然れども未だ藩論を一變するに至らざるに、聯合艦隊は下關を砲撃して、長州藩の兵大いに破られ、博文等の慘澹たる苦心も全く水泡に歸せしかば、高杉晉作及び馨等と力を講和に盡くして、能く其の局を結べり。是より後明治維新の大業成るに至るまで、博文は常に長州



藩の爲に列國及び諸藩と應酬折衝の任に當り、隨つて内外の情勢に通ずること益精しく、識見は年と共に高し。

維新の業成るや、博文は二十八歳にして兵庫縣知事に拔擢せられ、次いで明治三年、貨幣制度及び銀行制度取調のためアメリカ合衆國に派遣せられ、翌年また岩倉大使の副使として歐米を巡遊し、歸朝後直ちに參議兼工部卿に任ぜらる。時に年僅かに三十三。累進の速なる多く其の比を見ず。爾來國家樞要の政務にして、殆ど博文の與り知らざるはなく、木戸孝允薨じ、大久保利通兇手に斃れて後は、輿望一身に集り、廟堂の上一日も博文

無かるべからざるに至れり。

斯くて工部卿より内務卿に轉じ、又時に宮内大藏の長官を兼ね、明治十八年官制改革と共に、四十五歳にして内閣總理大臣の重職に就けり。是より先明治十五年、憲法取調の大命を帯びてヨーロッパ各國を歴訪し、歸朝後劇務の傍、帝國憲法及び皇室典範起草の任に當れり。博文其の完全無缺ならんことを期し、日夜精勵、皇國の國體を基本とし、先進諸國の制度を參酌し、遂に千載不磨の法典起草の功ををへたり。此の一勳業を以てするも、博文の名は永く竹帛に垂るゝに足れり。

明治二十七八年戰役の際、博文は内閣總理大臣として



畫策宜しきを得、全權大臣として講和談判の衝に當り、  
下關條約を締結して帝國の國威を發揚せり。又明治三  
十七八年戰役に際して獻替盡瘁する所甚だ多く、既に  
して韓國の統監に任ぜられ、銳意韓國の指導啓發に當  
る。後日、韓國併合の圓滿に遂行せられしは、博文が用意  
周到なる施政の功に基づくもの多し。

博文はたゞに政治の樞機に與りて、帝國の發展に偉勳  
を建てしのみならず、或は宮内卿として、或は帝室制度  
取調局總裁として、皇室の制度典例を定めたる等、功績  
擧げて數ふべからず。又政黨を組織して自ら其の總裁  
となり、我が國政黨政治の發達に盡くすところ少から

ず。

明治四十二年十月、六十九歳の老軀を以て滿洲視察の  
途に上りしが、二十六日ハルビンに於て兇漢に狙撃せ  
られ、光輝赫々たる一生は其の終を告げぬ。凶報の一た  
び傳はるや、内外各地よりの弔電雨の如く至り、東西の  
新聞は筆を揃へて生前の勳功を稱へたり。天皇軫悼あ  
らせられ、國葬の禮を以て葬らしめ給へり。

葬儀に先立ち、畏くも勅語を下して、股肱之レ倚り、柱石  
之レ任じ、忠貞君ニ奉じて公正事ニ當り、勳績倍ス顯レ  
テ望ミ一世ニ隆シ。と宣ひしを見ても、如何に御信任の  
厚かりしかを知るべし。博文久しく顯要の地位にあり



ながら、曾て身後の計を念とせず、國家の重きを以て自ら任じ、盡忠奉公に専らなりしは、誠に後世の龜鑑とするに足れり。

## 第七課 國寶

我が國には到る處森嚴なる社殿あり。壯麗なる堂塔あり。名匠の手に成れる繪畫、彫刻、工藝品あり。由緒ある文書典籍の類あり。また一世にあらはれし偉人傑士、後代を導きし學者、文人の舊宅の遺存せるあり。是等を觀る時、我等はそゞろに古の美術に魂を奪はれ、或はそのかみの歴史をしのびて、一種無限の感に打たれずんばあらず。

かくの如き建造物及び名寶は其の數頗る多く、之を諸外國に徵するに、其の豊富なること我が國の如きは比類けだし稀なり。これ畢竟我が國體と我が國民性との然らしむる所にして、其の我等國民に與ふる教訓は、實に至大なるものありといふべし。

然れども是等は能く幾多の星霜變故を経て、幸に今日に遺存せるものにして、其の既に壞廢散逸せるものに至りては、擧げて數ふべからず。若し其の保存の法宜しきを得ざらんか、國民の誇たるべき貴重なる遺物も、終には絶滅に至る恐なしとせず。これ國家が是等のものを國寶に指定し、其の保存法を設けて之を保護する所



以なり。

國寶保存法に據れば、建造物、繪畫、彫刻及び工藝品等に  
して、特に歴史の證徴となり、若しくは美術の模範とな  
るべきものは、國家公共團體の所有たると個人の所有  
たるとを問はず、ひとしく國寶として指定せらる。國寶  
はみだりにこれが原形を變更し、或は海外に輸出する  
ことを禁ぜられ、其の修理に際しては、必要に應じ國費  
によりて補助せらる。

古きをたづねて新しきを知るは、我等の向上に缺くべ  
からざる所。過去の文物を尊重し、これによりて今日の  
文明の由來を知るは、即ち將來に於ける國運隆昌の基

高談四

礎をつくる所以といふべし。されば國寶の保存を圖り、  
永く過去の文物を傳ふるは、これ實に國家須要の事業  
たるのみならず、また國民の大いに力を用ふべき所な  
り。

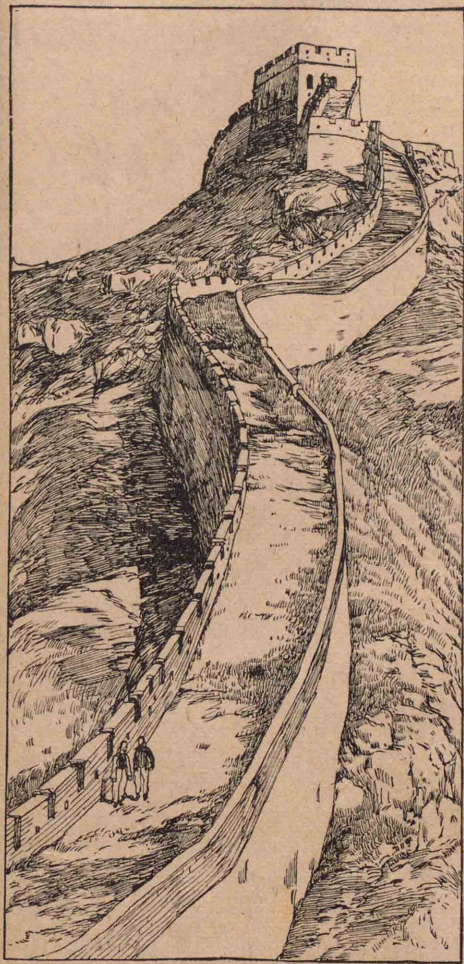
### 第八課 萬里の長城

萬里の長城は支那の北部にあり。東、山海關より起り、西、  
嘉峪關に至る。其の間、高山を越え、深谷をわたり、廣原を  
横切りて、蜿蜒七百餘里に及ぶ。城壁の主なる處は、外面  
を煉瓦又は石にて疊み、内部を土にて埋む。高さ凡そ二  
丈五尺、厚さ一丈五尺、其の上は轡を並べて騎行するこ  
とを得べし。六十間毎に方形の櫓あり。煉瓦にて造り、高



さ五丈。城壁と櫓との上部には凹凸の胸壁を設けて、敵を射撃するに便せり。

今より二千數百年前、支那は戰國の世とて、諸侯分争して天下亂麻の如し。北方の胡人此の機に乗じてしばしば内地に侵入せしかば、北部に位せる秦趙燕の三國は、



各國境に長城を築きて、其の侵入を防げり。其の後秦王遂に諸國を一統

して皇帝となるに及び、永く胡人侵入の患を絶たんとて、さきに秦趙燕の築きたる長城を修繕し、尙新に増築して、いはゆる萬里の長城を成せるなり。これがために使役せる人夫數十萬人、數歲の日子を費したりといへば、其の大工事なりしこと推して知るべし。今存するものは秦帝の造りしまゝのものにあらず、其の後幾度か修繕改築したるものなりといふ。

秦帝の長城を築けるは、外敵の侵入するを防がんがためなりき。然れども書物をやき、學者を坑にする等の暴政舉げて數ふべからず。故に自ら始皇帝と稱して、二世、三世、統を萬世に傳へんと期せしかども、死後未だいく



ばくならざるに、天下再び亂れ、僅かに二世にして漢の世となれり。支那の詩人が、

知らず、禍の蕭牆の内に起るを。

虚しく築く、防胡萬里の城。

と歌ひたるが如く、外敵を防がんと欲して長城を築き、内部に禍亂のきざすを知らざりしこそ笑止なれ。金城鐵壁の守ありとも、政令下に行はれず、國民心服せずんば、國家の安寧は期し難かるべし。

いづくんぞ知らん、萬里連雲の勢。

及ばず、堯階三尺の高きに。

第九課 東西雜話

吳の國に延陵の季子といふ人があつた。或時主君の命で他國へ使に行く途中、徐の君をたづねた。徐の君がつくづく季子の劍を見て、口にこそ言出さなかつたけれど、如何にもほしさうな様子をした。季子はその心を察したけれども、君命を奉じて使する途であるからと思つて、與へなかつた。使の任を果して歸路に立寄つて見ると、徐の君は既に死んでゐた。季子は大いに悲しみ、彼の劍を其の墓の側の木に結び附けて歸つた。從者が怪しんで、徐の君は既になくなられたのに、誰に與へられるのか。といふと、自分はさきに心の中で與へようと思ひ定めてゐた。其の人が死んだからとて、初の志を變へ



るわけにはいかぬ。といった。

引力の法則を發見したイギリスの理學者ニュートンは、學術の研究に熱心を餘り、折々日常の事柄に物忘をするくせがあつた。或日、いつもの通り書齋に立て籠つてゐると、召使が朝食を用意しようと思つて、生卵と鍋を持つて來た。ニュートンは、自分で煮るから、其處へ置いて行け。と命じた。暫くたつて來て見ると、これはしたり、卵は机の上に残つて、鍋の中では懷中時計がくたくたと煮え返つてゐる。

春秋の頃、晏嬰といふ人が齊の國の相となつた。其の御者が馬にむちうち、揚々として得意になつてゐた。御者

高讀四

の妻がそれを見て、夫に、晏子は身のたけ五尺にも足りないが、齊國の相として、諸侯の間に知られてゐる。然も思慮深く、出入にも人に下る様子がある。君は身のたけ六尺以上もありながら、御者となつて得々としてゐるのは、如何にもあさましいことではないか。といった。夫は大いに恥ぢて、其の後行を慎んだので、次第に高官に任用せられたといふ。

ドイツのコンラード王がウエルフ侯を攻めた時の事である。ワインスベルヒの町は久しい包圍に落城の運命に陥つて、明日はいよく開城といふことになつた。其の時城中の婦人から歎願があつて、開城の時には、婦人



が各自其の背に運ぶものだけは許してもらひたいといふ。其の願は直ちに許された。さて翌朝城門から續々出て来る婦人を見ると、皆其の夫や親兄弟などを背負つてゐる。城主も亦其の夫人に背負はれて列の中に居た。寄手の軍勢は是はけしからぬと怒つたが、王は笑つて、王者に二言は無い。許せよ。といつた。

後漢の鮑宣の妻は、字を少君といつた。宣は少君の父に就いて學んだが、少君の父は宣の清貧に安んじて勉學するのを感じ、遂に娘を宣に嫁せしめた。少君の家はもとと富貴であつたから、持參の衣類、道具總べて善美を極めた。宣はそれを見て、御身は富貴の家に生まれて

美衣美食に慣れてゐる。それに反し我は貧賤であるから、如何にも釣合はない。といつた。すると少君は、父は君の志に感じて私を嫁せしめたのである。既に一旦嫁した以上は、何で夫の心に背きませう。と、其の日から侍女を返し、美衣を脱ぎ、短い布子を着て、小車を引きながら、宣と共に郷里に行つて宣の母に會つた。これより薪水の業を自らして、婦道を行ふこと誠に固かつたから、感ぜぬ者はなかつた。

フレデリック大王はプロシヤ近代の名君といはれた人である。軍隊を檢閲する毎に、何時も兵士に向つて三箇條の問を出した。第一、年は幾つか。第二、服役以來何年か。



第三、俸給も用品の給與も十分か。の三問である。或時フランス生まれの新募の兵が、不日檢閲があるが、ドイツ語がわからぬと當惑してゐると、一人の同僚が、王の問は斯くくゝの順序であるから、斯くくゝ答へよ。と教へてくれた。其の日になつて、王は第一に問うた。

王、服役以來何年か。

兵士、二十一年。

王は驚いて、

王、年は幾つか。

兵士、三箇月。

王は愈驚いて、

王、汝の言ふことは更にわからぬ。朕と汝とどちらかが狂つてはをらぬか。

兵士、兩方とも。

第十課 元寇の防壘

文永の役後、我が軍は博多灣附近一帶の海岸に防壘を築いて、元軍の再寇に備へたが、果して弘安四年五月下旬元軍の一隊は、九百の戦艦に乗じて堂々と博多灣頭に押寄せて來た。此の時、我が軍が此の防壘によつて敵を防ぎ、七月の末神風の吹荒むまで奮戦二箇月、終に一兵をも九州の地に上陸せしめなかつた勇武は、實に感ずるの外はない。



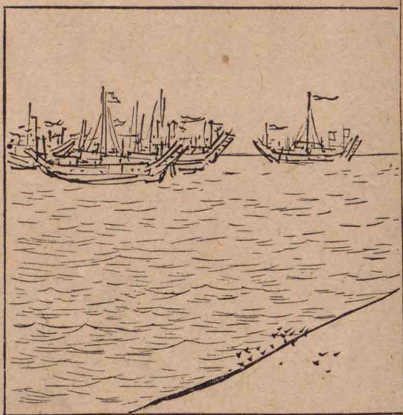
しかも日本武士の偉大な勳功の後には、實に此の防壘の多大な効果がひそんでゐるのである。

當時築造された防壘は、其の後破壊されたところもあるが、幸に大部分は白砂の中に埋没して、當時のままに残つてゐる。それが近頃に至つて發掘されたので、昔の面影をまのあたり見る事が出来る。それによると、防壘は石を積重ねて造つたもので、厚さ一丈内外、高さ六七尺、海に面し



高嶺四

た方は傾斜を急にして、容易によぢ登ることが出来ないやうにしてある。戦の時は此の壘上に登つて、寄せ来る敵を下げ矢に射て防戦したもののらしい。



今此の防壘の上に立つて六百年の昔を回顧すると、國難當時の悲壯な心持がありくと胸に浮かぶ。あゝ防壘、防壘は實に我が祖先の武勇を助けて國難に當つた、名譽ある一大史蹟といふべきである。

第十一課 ハワイ通信

拜啓先日は御懇書にあづかり有難く存候益、



御壯健の由折角御勉強祈上候私事も丈夫にて愉快に執務致し居り候間御安心なし下されたく候さて本日は御返事かたぐ御参考までに當地の状況の一斑を申上ぐべく候當ハワイがアメリカ合衆國の領土にて十餘の島より成立ちをる事は既に御承知の事と存候總面積は約六千五百平方マイル我が四國よりはやゝ小さきくらゐにて其の中ハワイ島が一番大きく次はマウイ島其の次はオアフ島に候小生が唯今在住致候ホノルルは此のオアフ島に在りハワイ第一の都會に候

高讀四

ホノルルは我が横濱より三千四百海里アメリカ合衆國のサンフランシスコまでは二百海里これ有り日米間航路の唯一の寄港地とて此の間を航行する船は殆ど立寄らざるなく航海者にとりてハワイは全く洋上のオアシスとも申すべき地に候本島の人口は四十一萬餘に候が其の内土人は其の一割にも足らず他はアメリカ人と各國の移住者にて候我が國人は明治元年より移住し始め今日にては約十六萬外國人中最も多數を占居り候多くは農業勞働者にて

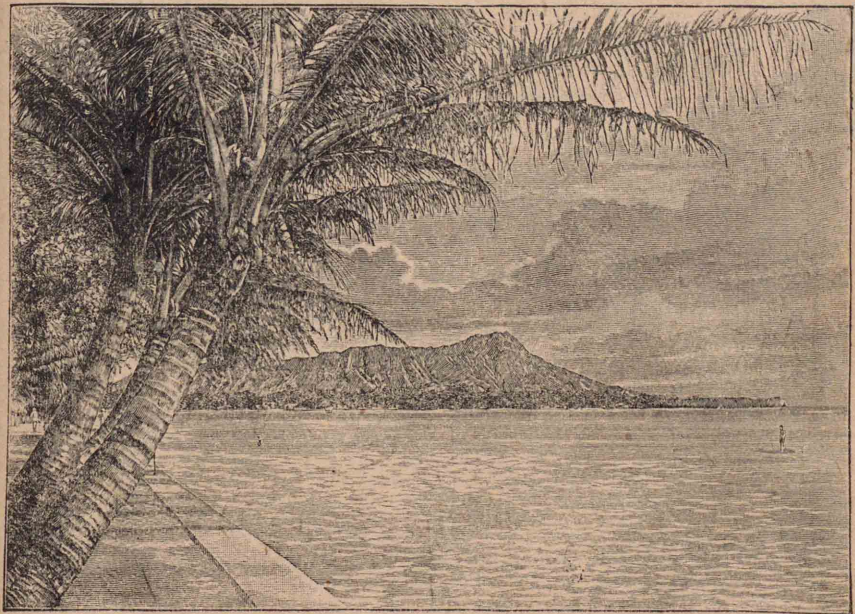


甘蔗かんしゃパイナップルコーヒーの栽培製糖等に  
 従事致し居り候又漁業に従事するものも相  
 當これあり此の方面はむしろ日本人の獨占  
 とも申すべく候とにかく日本人が永年ハワ  
 イの産業の爲盡くしたる事は非常のものに  
 て當地産業の發達は實に我が國人に負ふ所  
 少からずと存候當地には斯く多數の同胞居  
 住致し居り候事とて之を相手とする邦人商  
 店の多きは勿論總領事館あり銀行あり其の  
 他日本語學校百六十餘校邦字新聞社十數社  
 神社寺院八十餘以て如何に日本人が當地に

活動しつゝあるかを御推察願上候日常の生  
 活に於ても衣服食料品等本國の品物を求む  
 るに何一つ不自由とてはこれなく故郷を離  
 れて遠地に參り居る感は殆どこれなく候  
 當地はいはゆる熱帶圈けん内にある事とて何人  
 も暑熱燒くが如き處と想像致候へども參り  
 てみれば案外にて絶えず海風吹渡り殊に驟しづ  
 雨多きため存外涼しく氣温は年中十五度よ  
 り三十度ぐらゐを上下し誠に心地よく候學  
 校の冬休に子供等が海水浴をするなどは日  
 本にてはとても考へ及ばぬ事なるべく候



斯様に氣候に變  
 化少きため年中  
 植物のよく繁茂  
 するは驚くばか  
 りにて當市の名  
 のホノルルとい  
 ふも「ゆたか」とい  
 ふ意味なりと聞  
 及び候當地に參  
 りて海岸に立ち  
 並ぶ椰子の並木



の見事なるには誰しも先づ一驚致す處に候  
 が足一步島内に入れば此の外南國特有の常  
 磐木<sup>ハ</sup>緑を滴らし其の下陰には紅黃紫白色と  
 りどりなる美花咲亂れ更に傍には累々たる  
 果物のみのりをるなど春とも夏とも秋とも  
 申されぬ光景全くハワイは常春の國常夏の  
 國常秋の國にて四季の最も好きところのみ  
 を集めし地とも申し得べく候殊におもしろ  
 きは四季の現象を一本の木にも見らるゝ事  
 にて一方に若芽萌出<sup>ハ</sup>でつゝある他方には緑  
 葉茂り花美しき枝の陰には見事なる果物熟



し居り候

當地が自然の恵に浴する事豊かなるは植物にのみ限り申さず動物にも羽毛美しき鳥類非常に多く處により野生の孔雀七面鳥などの居るも珍しく候反對に猛獸と申すものは殆ど居らず多からんと思はるゝ蛇の全く居らざるも意外に候

終に最も美しき天象の事を申し添へ候當地が熱地の常として驟雨多き事は前に記し候が其の雨後の美觀は何とも申されず生ひ茂れる椰子の間より白雲ふはりくと浮かぶ

かと思れば七彩鮮かなる虹の二重にも三重にもかゝるなど内地にては想像も及ばぬ美しさに候殊に此の虹は晝のみに限らず夜も現れ夢のやうなる其の姿はさながらお伽噺の國に在る心地を致させ候又空氣清きため空も限なく澄みをる事當地の一特色にて何時も月色の美しき事日本の秋にも勝り候此の月を眺め彼の花に圍まれそよくと吹く涼風の中に居る心地御想像なし下されたく候

なほ此の外にもキラウエヤと申す火山の壯



觀當地特有なる魚類の美しさ土人が傳ふる不可思議なる傳説など申上ぐべき事は數々これ有り候へどもそれ等は他日に譲り候太平洋上日米の接觸點たる當地の貿易上其の他より見て如何に重要なる地點なるかはここに説くまでもなき事と存候  
 とにかく當ハワイは煙波果なき太平洋上の一オアシス否人世に隔絶せる一別天地否々自然の恩惠豊かなる極樂世界とも申すべく小生は此の極樂中にありて毎日樂しく働きをる事を申し添へて筆をとゞめ申候早々

高議四

年月日

西田洋一

青山 茂様

第十二課 柳生宗矩

寛永十四年十一月十日、有馬玄蕃頭豊氏の家に猿樂あり。柳生宗矩も招かれて之を見る。酒宴半ばなる頃、宗矩が郎黨來り、主を呼出して、君は未だ知しめされずや、肥前國高來郡の土民等、悉く耶蘇の門徒にて、藩主松倉殿に叛き、有馬の古城に立て籠る由、筑紫より早馬來つて告申すによつて、板倉内膳正重昌追討の御使を承り、はや御發向候ひぬと申す。宗矩聞きて、さあらぬ體にて座に歸りて、豊氏に向ひ、急ぎて歸るべき事出來て候ふ。足



早き馬貸し給へ。といへば、鞍置いて引つ立つ。急ぎ打乗つて、西を指して馳行き、品川に至つて、板倉は過ぎしか。と問ふ。今は遙かに進み給ふらん。と答ふ。馳行きて川崎に至り、また問へば、今は二三里も隔り給ふべし。と答ふ。日は既に暮れなんとす。せん方なくて引返し、城に登る。日は疾く暮れてけり。近侍の人を以て、宗矩申すべき事あつて伺候しぬ。と申しければ、將軍光家やがて召して、何事ありて参りし。と尋ねらる。宗矩畏まつて、今日さる人の許に酒盛し候ふに、筑紫にて逆徒起り、内膳正追討の御使を承り、馳向ふと承りし程に、仰の旨と稱し止めばやと存じ、馬を走らせて追ひかくれど、追付かず、日暮れ

候ふ故に、此の由を申さんとて参りて候ふ。といふ。何によりてか重昌を止めんと致しけるぞ。と問はるれば、君は唯並々の土民等叛逆せしと思し召さるればこそ、追討の御使斯く軽く候ひつれ。總べて宗門に就いて起る軍は、大事のものに候ふ。斯くては重昌必ず討死仕るべし。如何にも謀りて止めばやと存じ候ひし。と申す。以て外の不興にて座を立たる。

宗矩次の間に在りて、夜更くれども退出せず。將軍此の由を聞かれて、重ねて出座あり、宗矩を召す。重昌死すべしとは何故斯くは申すぞ。とありし時、宗矩、さん候ふ。それ兵の道は勇を以て旨と仕る。勇士は必ず死を恐れず。



三軍の士をして悉く死を恐れざらしめんことは、古の能く兵を用ふる者も及び難しと承りぬ。凡そ下愚の人にして法を深く信じ候ふ者は、我が法を固く守りて死するを以て身の喜とす。これ百千の衆、悉く期せずして必死の勇士と變ずる理にて候ふ。遠く例を引くまでも候はず、織田殿の兵威を以て伊勢の長島を攻めて、多くの大將を討たれ、諸卒を失ひ、年を重ねてやう／＼に城を落さる。又攝津國大阪の城をば終に落し得ず、天子の勅命をかりて、中直りして、軍は終りて候ふ。三河國の一揆は近く御家の事に候ふ。去りし大阪の軍に、重昌いまだ年若く候ふ時だにも、數十萬騎の中に唯一人選み出

されて、大事の使承つたる程の者なれば、此の度の兇徒を亡さんに何事かあるべき、且は今の時御使承る上は、誰か其の下知に背くべきなど思し召されなば、事の違ひ候はんか。重昌が今少し位も高く、祿も厚く、又年頃重き職をも司どつて、常に世にも人にも恐れ敬はれて候はんには、誠に良き御使にこそ候ふべけれ。今の重昌の身にて、西國の大名等の軍勢を催して城を攻めんに、一度は御使を承りたるに恐れて、其の下知に従はんが、思ふにも似ず攻めあぐみて候はんには、重昌如何に思ふとも、心に任すべからず。其の時に至りなば、御一門の人か、さらば宿老の中を、選みて、重ねて御使に遣はさる



るより外あるべからず。さあらんによつては、重昌何の  
 面目あつてか、生きて再び關東に還りて見參には入り  
 候ふべき。惜しき御家人を失ひ候はんことは、永き天下  
 の御恥辱にこそ存ずれ。あはれ、宗矩御許を蒙らば、追付  
 きて能くこしらへて、召具して參り候ふべし。と憚る所  
 なく申しければ、將軍後悔の色見えけれども、更にそれ  
 もかなひ難くやありけん、夜いたく更けたり、まかり歸  
 りて休み候へ。と暇賜はつて宗矩退出す。後に思ひ合は  
 するに、宗矩が申しし所、掌を指すよりも明らかにぞ候  
 ひける。(藩翰譜ニ據ル)

第十三課 雪

「夏蟲氷を知らず」といふ語もあるが、熱い國の人は雪の  
 美觀を知らない。空が薄墨色に曇つて、底冷がすると思  
 ふ中、何時か篩ふるでふるつたやうな細かな白い片々が落  
 始める。見る中に天地一白、葉一つも無い冬木立も、常磐  
 木の林も、綿をかけたやうに眞白になり、金殿玉樓も茅  
 屋も、差別なく同一の色に埋められる。路上の泥も隠れ  
 て、人の足跡、車のわだちが残るかとするれば、又忽ちに降  
 埋められる。路行く人は鶴の羽衣を着て往來すると、昔  
 の詩人は見立てた。花の美は地上の一部分に止るが、雪  
 の美は天地を一つに包んだ壯觀である。多くの草花の  
 枯果てた時節、自然は又此の壯觀を與へて、我等の心目



を一新するのであらう。

雪の景色は、水邊山間何處としておもしろくない處はない。

雪の江の大舟よりは小舟かな

芳川

は水上の風光。

山の雪夜は家ある火影かな

奇淵

は山中の夜景。

長々と川一筋や雪の原

凡兆

見渡す限り野山は雪になつて、川ばかりを埋め残した景色である。

旅人の外は通らず雪の朝

去來

松原に飛脚小さし雪の暮

一品

に街道往還のとだえがちな寂しさを思へば、

箱根越す人もあるらし今朝の雪

芭蕉

旅人に我が糧分つ深雪かな

几董

に雪中の山路の困難は一層思ひやられる。

狼の聲揃ふなり雪の暮

丈草

荒熊のかけ散らしてや笹の雪

北枝

深山の荒涼たる景色、身にしむ心地がする。

戸にさはる音も静けし夜の雪

如洋

雪折れも聞えて暗き夜なるかな

蕪村

といふやうに、夜中降通して降積つた幾尺の雪、朝の眺



の美しさよ。

静かさや雪のあしたの金閣寺

灌園

何時か朝日が輝き渡つて、

雪はれて空さりげなき朝日かな

鯨山

美しき日和になりぬ雪の上

太祇

第十四課 賢母の教

一

雪ならば幾度袖を拂はまし花の吹雪の滋賀の山越、それはやよひの春の頃、櫻狩して行く道の眺もあかぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々たる雪は路を没し、凜冽たる風は膚をつんざく。辛

苦の中に滋賀の山を打越ゆれば、満目蕭條たる湖上の風景、唐崎の松は暮靄の中に隠れて見えず、堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴き渡る。見渡せば白雪皚々たる比良の峯、今より山路にかゝらば、山中にて日は暮れん、疲れし足の進み難きに、坂本の邊にて宿りを求めんかと、獨旅の少年は、前路をにらんで暫く湖畔に立ちたりしが、やゝありて思ひ返し、彼の山を越ゆれば我が故郷、今一息にて母君の許に着くなるに、何とて空しく此處に留らん、夜にてもあれ朝にてもあれ、家に歸るを得ば疲も厭はじ、いで、今宵の中に此の山を越えんものと、心を取直し、再び足を踏みしめて、薄暗き山路へこそ



はかゝりけれ。

いたはしや藤太郎、母に會ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を杖にすがりて唯一人、たどりくゝて行く道の、岩につまづき木の根に倒れ、血さへ足より流れ出て、道の邊の雪を紅に染めながら、尙も心を勵まして、風雪の中を登り行く。やがて日は暮れたり。闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、いや増す寒さは骨に徹りて、手も足も凍るばかり。寂寞たる満山、耳に聞ゆるものとしては、閉ぢし氷の下潜る細谷川の水の音、杉の枯葉を鳴らす風、或は積雪こずゑを壓して、枝折れ雪の落つる響など、微かにもものすごく聞えて、恐しとも悲しともたとへん

やうなし。斯かる難所と知りもせば、籠にて一夜を明かししものを、旅馴れぬ身の悲しさに、足に任せて此の深山路へかゝりしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出られず後へも戻られず。

藤太郎は進退きはまりて、半ば死せるものの如く、松の根方に打倒れたり。其のまゝ起きも上り得ず、降る雪を恨めしげに眺めてありけるが、次第に飢を感じて、寒さは一入身にしみ渡り、何時しか眠るともなく、死ぬともなく、前後も知らずなりにけり。

やゝありて、耳許に人の呼ぶ聲。微かに眼を開けば、身は辻堂の縁に在り。我を呼びしは年老いたる一人の僧を



りけり。僧の傍には小牛の如き黒犬一頭、おとなしくひかへをり、縁の前にはたき火の灰僅かに残り。あはれ藤太郎は、危くも凍死すべかりしを、幸に此の犬に捜し出され、此の老僧の情にて漸く助けられたりしなり。

## 二

懐かしの故郷や、藤太郎は昔覚えし山川草木を目の前に見て、忽ち足の疲も打忘れ、道を急ぎて我が家の方に向ひけり。夜は漸く明けたれども、雪空の寒さに閉ぢられてや、道々の家は未だ多く起出でず。彼の家は我が友の家なりけり。此の家には我に優しき老人ありきなど、昔の事を思ひ出で、そゞろに哀を催しつゝ、暫くにし

て我が家の前に来れり。

見れば門は舊によりて立ちたれども、半ば雨に朽ちて柱も傾き、土塀も崩れたるところあり。前庭の古松、刈る人なければ枝繁れり。竹の一叢むら思ふまゝに根を延ししと見え、彼方此方に生ひ茂りて、雪に堪へざる風情あり。玄關けんかんの戸は未だ開かず。母君は未だ起き給はぬにやあらんと、屋敷の内に入りて勝手の方を見れば、車井戸のきしる音さも寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確に母なる人、藤太郎は忽ち胸ふさがりぬ。昔は數多の男女を使ひて、勝手などに出でられしことなき母君が、此の雪の朝の寒空に、自ら水を汲み給ふか、情なしと湧出



づる涙止め敢へず、急ぎ井戸の側に驅行きて、後より其の袂を引き、あゝ母様、私が汲ませう。」と涙ながらに取りすがる。事の意外なるに、母は驚きて振返り、誰か。おや、藤太郎。どうして此處へは。はい、母様のお手助を致しに参りました。お話は後で申し上げますから、先づ内へおはいり下さりませ。あゝ、おつむりへ雪が。」と、孝子の真情片時も母を此の雪中に立たしむるに忍びず。母は車井戸の綱をしかと握りて石の如く立ちたるまゝ、御祖父様とでも御一しよか。いえ、唯獨で。母は聲を勵まし、御祖父様が獨そなたをお出しなされたか。いえ、濟まない事とは思ひながら、御祖父様には知らせずに参りました。

「えつ、なぜそんな事を。」——さつと吹來る朝嵐に、地上

の雪はくるくくと卷揚げられて、横に二人の顔を打つ。

藤太郎は、母を思ふ一心に遙々歸り來りし次第を物語りぬ。母は我が子の優しき心根にそゞろに涙にむせびしが、忽ち思ひ返しけん、あざ





と言葉を勵まして、そなたは此の母の言葉を忘れましたか。そなたを御祖父様にお頼した時、一旦國を出たかは、りつばな人にならない中は、決して途中で歸るなと、あれ程堅く言聞かせたではないか。此の母が難儀を忍ぶのも、唯そなたをりつばな者にしたいばかり。りつばな者にならないで、家に居て手助をしてくれたとて、何のそれが嬉しからう。一人で來たものなら、一人で歸れぬことはあるまい。母は再び會ひませぬ。其の足ですぐ大洲へお歸りなさい。

餘りの事に藤太郎は、默然として言葉も出でず、力抜けして雪の上には、ひざまづきぬ。母は其の失望せる様子を、見て、いたはし、胸に満ち、斯くまで我が身を思ひて來りしものを、——百里の道の獨旅、定めて憂き事もつらき事も多かりしならん、——せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲を休めさせんかと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにしてまた思ひ直し、なまなかに弱き心を見せなば、修業の邪魔、獅子は子を千仞の谷に落すと聞くものを、そなたは母の言ふ事がわかりませぬか。と強くは叱れど、聲はうるみぬ。藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、微かなる聲にて、はい、わかりました。それならば、今から歸りますか。藤太郎は悲しき聲、はい、歸ります。とすなほに言ふ。



母はすなほに答へられては、尙更腸の絞らるゝ思。遂に堪へかねて忍び泣き、袖かみしめて聲をのむ。藤太郎はきつとして立上れり。母様、此の薬はあかぎれの妙薬で、世にも得難い品。差上げたいと思つて、わざわざ持つて参りました。これだけはお取りなされて下さりませ。と差出す。母は快くおゝ、そなたの志、これだけは受けませう。と手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとて上を向く。見合はす顔、互の目には涙一ばい。母は恥づかしと、じつところらふる心の苦しさ。子は堪へざりけん、薬を手より取落してうつむけば、雪の上にはほろほろと落つる涙。

雪はなほ霏々として寒風に飛べり。母が汲みおきし水を見れば、何時の間に張りけん、上は一面の薄氷。藤太郎は遂に心を勵まして、泣くく、我が家を立出でたり。見送る母、見返る子、満天の風雪路悠々。(村井寛、近江聖人ニ據ル)

第十五課 詠史十首

上毛野形名の妻

長澤伴雄

を、しくもたわやがひなに弓とりて

鳴らす弦の音たかくもあるかな

源義家

橘曙覽

年を経し絲のみだれも君が手に  
よりてをさめし東の國



平重盛

伊能穎則

身を捨てて親を諫めし言の葉の

露にぬれざる袖やなからん

源頼政

小出 粲

時鳥雲居に鳴きし夢さめて

扇の芝にあきかぜぞ吹く

青砥藤綱

小野 務

滑川水底照らす松の火に

深き心の見えもするかな

北條時宗

渡 忠秋

神風のもろこし船を拂ふまで

つくしにけりな武夫の道

楠木正成

野矢常方

君が爲散れと教へておのれまづ

あらしにむかふ櫻井の里

新田義貞

足代弘訓

歸り來ぬ越路の雁ぞあはれなる

吉野の春のはなも見ずして

上杉謙信

高崎正風

贈りけん鹽の色にも見ゆるかな

越路の雪のきよきこゝろは

徳川光圀

内藤存守



湊川清きながれも西山の

月の光にすみまさりつゝ

第十六課 ボアンナード君の歸國を送る詞

一日朝早く、余はボアンナード君を永田町の家を訪ひたりしに、君は例の如く文机ぶんぎによりて、餘念なく法條を起草しをられたるが、其の顔色疲れて常ならず覺えければ、病やある。」と問ひしに、病は斯くなん。」とて、其の脚を示されたり。見れば二つの脚共に水色になりてはれ太りたり。余は何故に靜かに養生し給はざるか。」と問へば、「司法大臣と約束ありて、某の日までに若干箇條を起草し終へざるべからず。此の義務は病によりて背く能はず。」と答へられたり。余且は驚き且はおぼつかなく思ひて、急ぎ山田司法大臣の邸に至り、此の由を告げけるに、司法大臣も共に驚かれ、即ち秘書官栗塚君を遣り、君を訪問せしめて、速に轉地療養あらんことを勧められけり。君は約束當事者の命を受けて、始めて心おきなく田舎に轉



養せられたり。

余は此の時家に歸りて、密かに歎息して思へらく、凡そ司ある人々にして、斯くまでに深き義務心に伴なへる



勉強を以ていそしみたらんには、立法事業並びに諸般の事の擧らざることやあるべきと。此の事一小件なれども、余は將來ボアソナード君の名譽ある史傳中の一段とすべき價值ありと信ずるがために、別に臨みて之を公衆の前に述べ。君の二十年間の立法上の功績の如きは、他の諸君の演述に譲りてこゝに多言せず。

余は實にボアソナード君と二十年來の友なり。場合によりては我が師なり。さるを病を以て餞マシヤクの席に臨むこと能はざるは、これぞ遺憾の極みなる。今書して君の旅の安全を祝し、併せて左の詞を以て君を餞す。

余は、君が曾て我が國を呼びて第二の本國といへりし

ことを記憶す。余輩は將來に遠く君を海のあなたに慕ひ望むと同時に、君も亦長く第二の本國を忘れざることを知る。ボアソナード君よ、君の第二の本國が立法上及び諸般の事業に於て如何に發達するかを見て、幸に余輩の爲に必要なる注意と勸告とを怠ることなかれ。

(井上毅「梧陰存稿」ニ據ル)

第十七課 法律及び命令

國家の法規は其の數が極めて多いが、何れも憲法の條規に基づいて、天皇が自ら之を發し、又は各省大臣などをして發せしめられたものである。是等の諸法規の中で、帝國議會の協賛を経て公布せられたものを法律と



いひ、其の他のものを命令といふ。但し通俗に法律といふ語を法規といふ意味に用ひる場合もある。此の場合には、命令も其の中に含まれるのである。

國民の權利義務に關する重要な事項は、總べて法律を以て定めるのである。衆議院の組織を定める衆議院議員選舉法や、人民相互の間に生ずる權利義務の關係を規定する民法や、地方自治團體の構成を定める市制町村制、府縣制や、兵役、納税の義務を規定する兵役法及び各種の税法は、何れも法律である。

命令には、天皇の發せられる勅令、各省大臣の發する省令、府縣知事の發する府縣令等いろいろある。勅令以外

の命令は、各省大臣や府縣知事が、各自己の主管事務に關して發するものであるから、其の官廳の異なるに隨つて其の名稱も違ひ、其の定むべき事項の範圍も違つてゐる。例へば文部大臣の發する命令は文部省令といひ、主として教育に關するものであり、大藏大臣の發する命令は大藏省令といひ、主として財務に關する事項を定めてゐるものである。

原則としては、法律を以て命令を改廢することは出来るが、命令を以て法律を改廢することは出来ない。けれども臨時緊急の場合には、法律に代るべき勅令を發して、法律を改廢することが出来る。通常此の勅令を緊急



勅令といふ。

法律といひ、命令といひ、何れも國家の法規である。我等が之を遵奉するのにもとより輕重の別があつてはならぬ。

第十八課 道德と法律

法律を遵奉するといふことは、國民の重大な義務であつて、法律の命ずる所は道德も亦之を命じ、法律の禁ずる所は道德も亦之を禁ずるのは、いふまでもないことである。しかし法律は唯國民福利を増進し、社會公共の安寧秩序を保持するがために、國家が權力を以て定められたものであつて、道德に比べると、其の範圍は遙かに狭

い。

餘財の有る者が、公共の爲に應分の義捐をするといふやうな事は、法律が命ずる事ではないが、道德は善事として之を奨勵する。集會訪問等に約束の時刻を違へるやうなことは、道德上からいへば、非難すべき事であるが、法律は禁じない。是等は唯其の一例に過ぎないけれども、我々の日常の行爲は、法律の支配によるものよりも、道德心の發動によるものの方が多い。されば唯法律の命ずる所を行ひ、法律の禁ずる所を行はないだけでよいといふことの出來ないのは、明らかである。債權者に對して、債務者が約束の期限になつて其の債



務を果さない場合には、法律は、之を法廷に訴へ、財産差押の處分を請求する權利を與へてゐる。けれども道德上からいへば、少しも債務者の事情を察せず、法律の與へた權利だからといつて、むやみに之を行使するやうなことは、人情にもとるものとして、甚だしく擯斥せられるであらう。さればたとひ法律は許しても、道德は必ずしも之を許さないことがある。法律上有する權利はあくまで之を主張し、他人の自分に對する義務はあくまで之を強要して、道德に背かないものと思ふならば、それは非常な誤である。さればとて、其の權利に對する義務を有するものは、固より之を果さなければならぬ。

之を怠るのは道德も許す所でない。道德は必ずしも法律の與へた權利の行使を許さないが、法律の命じた義務は必ず之を果すことを命ずるものと思はなければならぬ。

之を要するに、法律の命ずる所は必ず之を行はなければならず、法律の禁ずる所は決して之を行つてはならぬ。法律の禁じない事でも、之を行ふべきや否やは、更に道德上の考量を要する。又法律は人間の爲すべき行爲の一部を示すものに過ぎないから、人間の爲すべき事は、法律の規定せる以外に多々あることを知らなければならぬ。



## 第十九課 田園の自然

六つになる親類の子供が、去年の暮から東京へ來てゐる。これに「東京と國とどつちが好いか。」と聞いてみたら、「お國の方が好い。」と答へた。どうしてか。と聞くと、「お國の川には鰻が居るから。」といった。

此の子供の「鰻」といつたのは、必ずしも動物の「鰻」のことではない。「鰻」の居る「清流」な小川の流、それに緑の影を浸す森や山、河畔に咲亂れる草花、さういふやうなもの全體をひつくるめた「田舎の自然を象徴する「鰻」てなければならぬ。東京でさかや屋から川鰻を買つて來て此の子供にやつてみると、此の事は容易に證明されるであらう。

私自身も、此の「鰻」の事を考へると田舎が戀しくなる。しかしそれは現在の田舎ではなくて、過去の思出の中にある田舎である。鰻は今でも居るが、子供の私はもう其處には居ないからである。しかし此の子供の私は、今でも「大人の私」の中の何處かに隠れてゐる。さうして意外な時に出て來て「外界をのぞくこと」がある。例へば郊外を歩いてゐて、道端の名もない草の花を見る時や、或は遠くの杉の森の「神祕的な色彩」を見てゐる時に、唯瞬間だけではあるが、此の「鰻」の幻影を認めることが出来る。それが消えたあとに残るものは、淡い「時の悲しみ」であ



る。(寺田寅彦「冬彦集」ニ據ル)

## 第二十課 我が家

自ら世を避けて門を鎖すとはあらねど、片田舎に住めば、來り訪ふ者自ら稀なり。東京の西郊、花園神社の傍、市街を離れて一字の茅屋立てり。屋外凡そ千坪、前に葡萄棚あり、後に竹林あり。梅や、櫻や、柿や、栗や、松や、檜や、椿や、楓や、いちじゆくや、さるすべりや、其の間に簇生す。四顧唯木立を見て、人家を見ず。何となく我が心に適する處なり。

我年來病軀を抱けり。我が志を伸さんには、先づ我が體の健康を復せざるべからず。西郊の地、空氣新鮮にして、街上の塵埃到り及ばず、たゞに我が心に適するのみならず、又我が體に適す。汽車の便をかりて都門より歸り來れば、満園の綠樹笑つて我を迎ふ。稚兒飛來りて我が手のふるしき包に取りすがる。例として土産の菓子あらんことを期するなり。

蒸暑き夏の夕、涼臺をいちじゆくの下に移して、一家晚餐に團欒すれば、竹葉そよぎて涼氣自ら盤上にほどばしる。一鉢の飯、母と分ち、妻子と分ち、庭の鶏と分ち、池の鯉と分つなり。今一つ、一匹の犬、何時も食時を違へず來りて畏まる。これ近隣の家の飼へるものなり。其の主人、近頃妻子を残して病死せり。喪家の犬のたとへ思ひ出



されて哀なるまゝに、**残肴**を投與ふるを常とすれど、貧家の**厨**魚なきこと多し。じやがいもなど與ふるに、唯鼻先にかぎたるのみにて、**悄然**として立去るこそ氣の毒なれ。

池あり、水二間四方に足らざるばかりなれど、清水湧きて流れ出でて田に注ぐ。もとは朽木中に満ちて、蛙やゐもりのすみかとなり、岸には雑草生ひ茂りて見る影もなかりしが、草を刈り、朽木を取りのけ、ゐもりを捕らふるること七八十に及び、水始めて澄みて、顔も寫るべくなりぬ。池邊に立ちて眺むるに、蛙ゐもりのみと思ひの外、長さ一尺ばかりの眞鯉ありておよぎめぐり、人の足音

聞きて穴深く潜み行く。大兒と中兒と之を見て興がり、今少し鯉を入れよといふまゝに、十尾入れ、二十尾入れ、三十尾入れ、終に大小七八十の多きに及び。白や、緋や、黒や、碧水に一種の模様を忍がき、或は集り或は散じ、時には水面に浮かび、時には空に躍る。形ばかりの欄干ある丸木橋に立ちて、之を眺め、之に餌をやること、三兒にとりては此の上もなき慰なり。

おぼつかなげに、「とゝとゝ」と呼びて、鶏に餌を與ふることも、亦兒等が慰の一つなり。家の四方に散在せる鶏、此の聲を聞きて喜んで來り集り、先を争うて食ふ。雄三羽、雌七羽ばかりあり。種類も一ならず。中にもしやもの雌



一羽、最も慄悍なり。餌を貪ること最も甚だしく、近寄るものの頭を嘴にてつくさま、如何にも憎らしく、他の鶏恐れて敢へて近寄らず。されど最も大にして好き卵を産むものは此のしやもなり。

園中兒等を喜ばしむるものは、梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗なり、いちじゆくなり、竹の子なり、鶏なり、鯉なり、蟬なり、蜻蛉なり。喜ぶ兒等を見れば、我は唯嬉しきなり。此の時、慾もなし、名利の念もなし。黙坐して自然に對すれば、初は其の愛すべきを覺え、終には其の敬すべきを覺ゆ。尙久しく對すれば、其の奥に不可思議なる何物かの潜めるが如く思はる。而して小兒は人類の中にて最

も自然に近きものなり。よしや子を持つて未だ親の恩は知らずとも、物のあはれは自ら知らるべくや。

樂しき我が團欒にも、尙一抹の愁雲たなびく。そは我が胃腸の病なり。母や齡古稀に近し。憂愁苦楚の中に數十年を送りて、我と相住むことも前後僅々十餘年に過ぎず。末年我と相住みて小安を得たるは、猶一年中の小春日和の如きか。然るに我が病弱の身は、其の小春日和をさへ、時雨の空に變ぜしめんとす。母は常に我が病身なるを氣遣ひ、我が食少きを心配す。親思ふ心にまさる親心と詠じけん、世に子の病ばかり親の心をいたましむるものなし。罪深きかな、抑不孝の子なるかな。昔は廉頗



老いて尙用ひられん、として、強ひて健啖せりとかや。そ  
れは功名故、我は親故に、強ひて餐を加へ、久しく絶ちを  
りし晝食さへものするに至りぬ。食進むやうになりて  
嬉しとて、母の喜ぶ様見るにつけても、覺えず涙ぐまれ  
しこと幾度ぞや。天町芳衛桂月全集ニ據ル

第二十一課 春を待つ歌

北風のすさぶがまゝに

野も山もうらさびたれど、

草木や、芽はふくらみて、

あたゝかき光を待てり。

ひねもすに口をつぐみて

鶯は谷にこもれど、

笹かげに空をうかゞひ、

巢を出づるかまへやすらん。

沖邊ゆく白帆も稀に、

波の花岸に凍れど、

立ち並ぶ筵に青みて、

海苔の香の高きが附けり。

やがて見よ、月はおぼろに、



鳥影は夢かと浮かび、

春の海静けきゆふべ、

櫻鯛躍らん近し。

斯くて今、春は隣れり。

雪分けて若菜も摘まん、

遠近の梅も尋ねん。

楽しきは春待つ心地。

第二十二課 世界の航路

始めて蒸氣力を用ひて大西洋を横ぎつた船は、僅か三  
四百トンの大きさのもので、早さも六七節に過ぎな

つたが、其の後だんく、發達して、現今では實に八萬ト  
ン以上のものもあり、其の早さも増大して、平均一時間  
三十一節を超えるものさへあるやうになつた。随つて  
大西洋を横ぎるに、最初は二十數日を費したのが、次第  
に減じて、十五日となり、十日となり、八日となり、今では  
四日以内に短縮した。斯く其の早さが増したのみなら  
ず、其の設備の上にも非常な進歩を來して、完備した客  
船では、船室の設備が陸上のホテルと變るところがな  
く、其の上無線電信によつて海陸通信の連絡を圖り、船  
中で新聞を發行して、日々の出來事を報道するまでに  
進んでゐる。

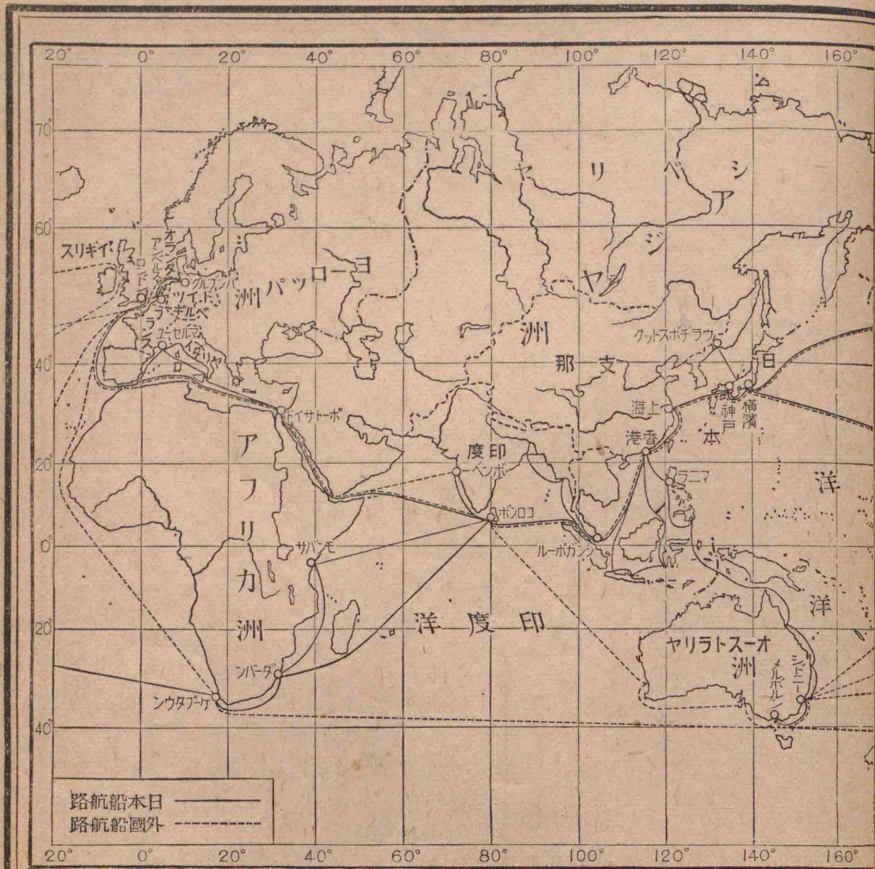


航路の延長は、貿易の發展や國防の強化に非常な關係のあるものであるから、各國は競つて自國商船の航行を奨励してゐる。

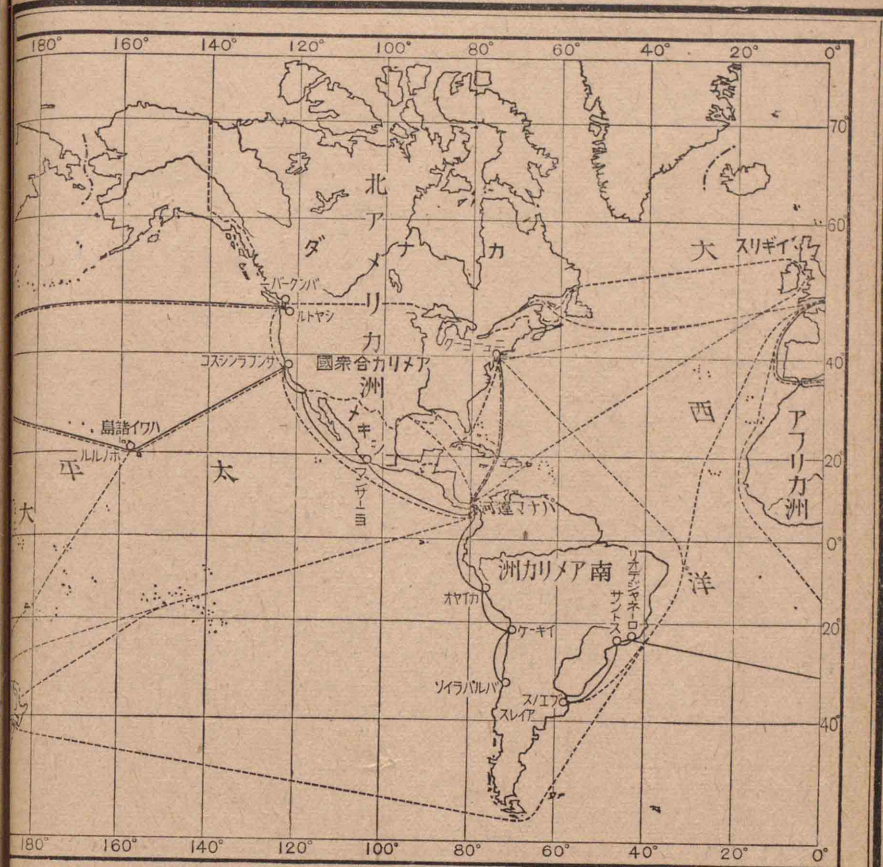
現今航路の最も發達してゐるのは、歐米二大洲の間にある大西洋で、世界の海運國を以て任ずる諸國は、劇しい競争をこゝに演じてゐる。しかし近時我が國を始め、太平洋沿岸諸國の著しく發達したること、又パナマ運河が開通して、大西・太平兩洋の連絡がついたことなどのために、太平洋にも劇しい航路競争が起り、今日では其の航路も非常な發達をした。今左に世界の航路中主要なものに就いて述べることにする。

大西洋の航路の中、北大西洋航路は、ヨーロッパ諸國、殊にイギリス・フランス・オランダ・ドイツ・ベルギー・イタリア等の主要港灣と、アメリカ合衆國・カナダ等の主要港灣との間を往來するもので、世界船舶の二分の一は此處に集り、前に述べた最新式の大船巨舶は、實に此の航路に用ひられてゐるのである。此の外、尙大西洋には、ヨーロッパと南アメリカを繋ぐ南大西洋航路がある。近年南アメリカの開發が俄に進んで、移民の招致、物資の輸出入が盛となつた結果、此の航路も亦次第に發達した。ヨーロッパと東洋又はオーストラリアを繋ぐ航路を、印度洋航路といふ。此の航路は、ヨーロッパ諸國と東洋諸國





主要なものとは太平洋横断航路で、南方航路と北方航路の二つに分れてゐる。此の航路に使用せられてゐる船舶は、北大西洋航路のものに比すると遜色はあるが、しかし中には船體も



及びオーストラリアとの交通貿易が近年盛になつたので、めざましい發達をした。此の航路に於ては、イギリスが最も優勢で、日本ドイツ等が之に次いでゐる。太平洋航路の中



頗る大きく、早さも亦能く平均一時間二十節を超え、優秀な設備を有してゐるものも少くない。此の航路に於て最も優勢なのは我が國で、アメリカ合衆國及びイギリスが之に次いでゐる。

我が國も明治以來大いに意を海運の發達に注ぎ、遠洋及び近海に多くの航路を設けた。現在遠洋航路の主なものとしては、歐洲航路・北米航路・南米航路・濠洲航路等がある。歐洲航路は、ロンドン線・ハンブルグ線・リバプール線其の他多くの航路に分れてゐる。北米航路には、サンフランシスコに行く航路、シャトルに行く航路の外に、パナマ運河を通つてニューヨークへ行く航路もある。

南米航路はペルー及びチリに行く西岸線と、ブラジル及びアルゼンチンに行く東岸線とに分れてゐる。濠洲航路は、香港・マニラ等を経て、濠洲諸港に至るものである。

イギリスは世界汽船總トン數の約三割を所有し、世界の諸港中イギリスの國旗のひるがへらない處はないと誇つてゐる。之に次ぐものはアメリカ合衆國で、第三位は即ち我が國であるが、近年に至り我が國海運の發展は益々著しいものがある。

### 第二十三課 手紙の認め方

手紙を認めるのは人と應對すると同じことで、先方の



如何によつて、程々の言葉遣に注意せねばならぬ。尊貴の人に對して、粗略な言葉を遣へば、失禮になることは言ふまでもなく、親密な間柄の人に餘り丁寧な文句を用ひれば、却つて他人行儀になつておもしろくない。手紙は又其の目的や場合の異なるに隨つて、精粗繁簡の趣を異にする必要がある。精密な説明を要する時には、長きを厭はず、委曲を盡くして書くべく、父母に近況を知らせたり、友人の不幸を慰めたりするための手紙は格別として、普通の手紙はなるべく簡潔を旨とするがよい。殊に急を要するものには、出来るだけ贅言を挿まぬやうにせねばならぬ。多忙な人にくだくしい手紙を出すのは、自分の徒勞はまだしも、先方の人に對して迷惑をかける所以である。人によると、餘り短いのは何となく手紙の體裁を具へぬやうに思ふが、手紙は用事さへ通ずれば、短くともよいのである。本多作左が陣中から、一筆啓上。火の用心。おせん泣かすな。馬肥せ。といふ手紙を留守宅へ送つたといふ話がある。これでも用事は十分に足りたのである。

慶弔や慰問の手紙は、自分の身を其の人の境遇に置いて、十分の同情を以て書かねばならぬ。儀式一片で誠意の籠つてゐない文は、詞は如何にりつぱに書連ねてあつても、喜を共にし、悲しみを分つ、の心を先方に達する



ことがむづかしい。

對話の場合には、不明の點があれば直ちに聞返すことも出来るが、手紙の上ではそれが出来ないから、明瞭に書いて、誤解の起らぬやうにするのが最も緊要である。年月日や氏名を省略したために間違を起したり、又文句の不備から先方の感情を害したりすることも珍しくない。

手紙の返事はなるべく速に出すがよい。之を等閑に附するときは、其の挨拶も書添へねばならず、益書きづらくなるものである。手紙の返事を忘れたり後らせたりするのは、交際の道にも背くことになる。

手紙を認めるのは決してむづかしいことではない。人と對話するのと同じ心持で書けばよいのである。

第二十四課 畫師の苦心

昔、泉州堺さかいのなにかし寺に、或畫師久しく寄食してありけるが、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して既に數年を経たり。住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、

「君は畫を以て一家を成せる人なるに、數年の間一度も筆を取り給ひし事なし。我もとより衣食の費をいとふにあらざれど、何時までもかくておはすべきにあらねば、今は何處へなりとも行きて君の技をふる



ひ給へ。愚僧も所用ありて京に上り、或は一二年滞在せんもはかり難し。」

といへば、畫師

「そはいと名残をしき事なり。さらば謝恩の爲に何か畫がきて參らすべし。」

とて、心構せしやうなりしが、尙筆も取らで數日を過しぬ。

或夜小僧、住持の居間に來りて、

「彼處に行きて、彼の畫師のする様を見給へ。」

とさゝやきければ、住持ひそかに行きて見るに、畫師は障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ、寢起する様なり。さまたげせんも心なしと思ひて、住持は其のまゝ、寢間に入れり。

翌朝畫師は常にもあらず早く起出で、ふすまに向ひてしきりに筆を動かしゐたり。其の畫かく所皆鶴にして、筆勢非凡、丹青の妙言ふべからず。かくて次の夜は如何にとりかゝふに、畫師は前の如く夜もすがら寢ねずして、明日はかく畫がかんなどひとり言してゐたりければ、住持は尙知らぬ顔して過ししに、十日餘りにして、ふすまの鶴は二十四五羽となりぬ。其の後又夜更けてうかゝひ見れば、今度はひぢを張り、足をのべ、手を口に當てて鶴の臥したる様をなせり。夜明けて住持、畫師に向



ひて、

「今日かき給はん鶴の姿はかやうなるべし。」

と、夜中に畫師のしたる様をまねて見するに、畫師驚きて、

「我が心に思ひ構へし事を如何にして知り給へるか。」  
と問ふ。住持

「昨夜のぞき見て知りたり。」

此の一言を聞くや、畫師又かのふすまの鶴に筆を取らず、唯杉戸に檜一本を畫がきて東國へ出立しぬ。

未だ一月もたゞざるに、かの畫師は突然歸り來れり。住持驚きて、

「東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。」

と問へば、畫師

「先に畫がきたる檜、何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、東國へ下る路すがら、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たれば、かき添へんために歸りしなり。」

とて一枝かき添へ、又別れを告げて立去れりといふ。

第二十五課 ローマの舊都

ローマ帝國の最も盛大なりしは、第一二世紀の頃にして、其の版圖はヨーロッパ・アジア・アフリカの三大洲にま

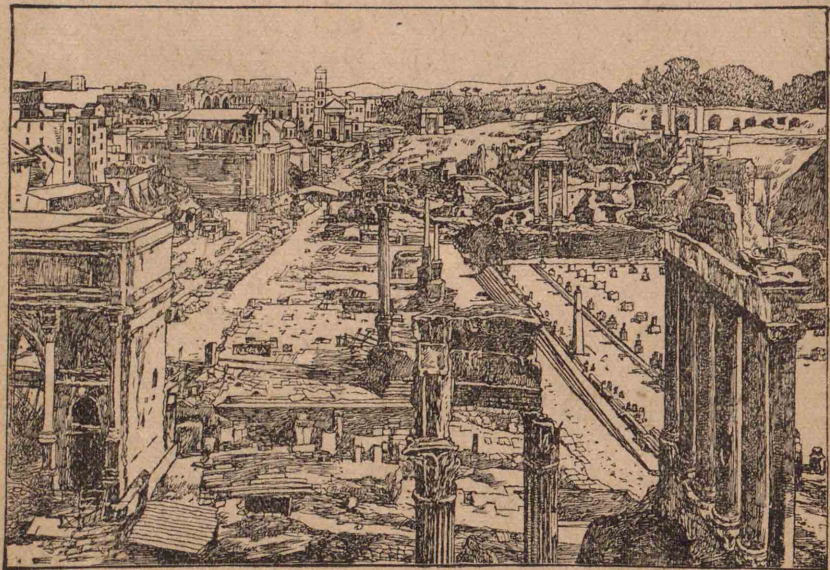


たがり、首府ローマは四方の富を集めて、壯麗善美、萬世不朽の都府たるを誇れり。然るに北方諸民族の侵入漸く劇しきに及び、驕奢に染み榮華に酔ひて柔懦風を成せるローマ人は、其の勢を阻止すること能はず、西曆三百三十年、コンスタンチン帝は遂に都をビザンチンに遷すのやむなきに至れり。是より後、さしもの都城も蠻人の蹂躪する所となり、宮殿堂宇其他壯麗なる建造物は多くは破壊せられ、市民離散して年々其の數を減じたれば、いはゆる不朽の大都も何時しか荒廢の極に達せり。

今のローマ市の繁華なる街路及び玉宮諸官衙の在る

處は、元のローマの邊隅にして、昔大廈高樓の櫛比せしあたり、今は唯荒廢寂寥の巷たるのみ。ローマに遊ぶ者をして深き感興を催さしむるは、車馬絡繹たる街路にあらずして、丘陵の上、郊野の間に寂しき影を留めたる廢墟殘壁なりとす。

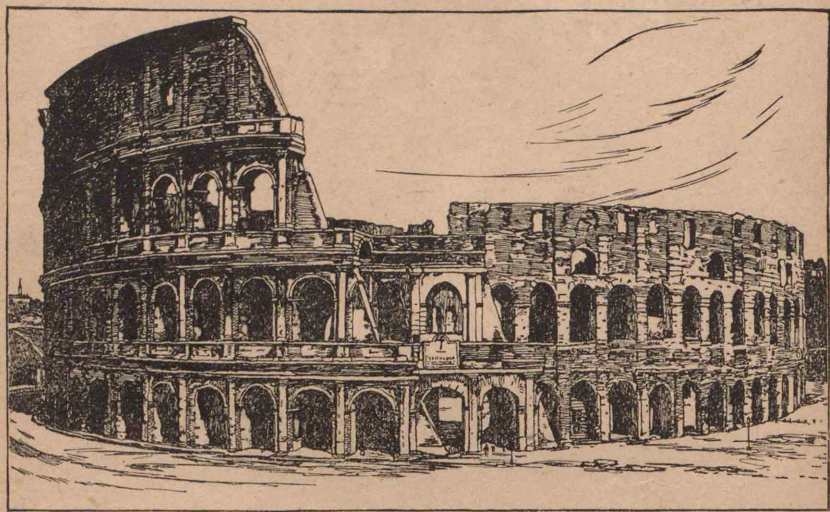
ローマに遊びて先づ觀るべきは、フォーラムの跡なり。フォー





ルムは丘陵に圍まれ、中央政府議會裁判所等總べて此  
 の大國を支配せし機關の在りし處にして、一千八百七  
 十年、イタリヤ政府之が發掘を開始せしまで、約千五百  
 年間は全く土中に埋没したりき。丘陵の上より見下せ  
 ば、三々五々並び立てる大圓柱の上に石梁の將に落ち  
 んとして危く支へられたるあり、屋壁の崩れて石柱の  
 み空しくそびえたるあり。傾ける石階、覆りたる礎石、所  
 在に雜然たり。

フォールムの東方に宏大なる楕圓形の建造物の半ば崩  
 れたるを見るべし。これ即ちコロセウムなり。古代ロー  
 マ人は勇猛なる行爲を好み、アジャ・アフリカ等より獅



子、虎、豹等の猛獸を集め來りて、  
 奴隸をして之と格闘せしめ、一  
 般公衆をして之を見物せしめ  
 たり。コロセウムは即ち其の格  
 闘場の稱なり。周圍五百二十五  
 メートル、長徑二百十八メート  
 ル、高さ四十八メートルあり。優  
 に四萬五千人を容るゝに足れ  
 り。其の落成式の際の興行は、百  
 日の久しきにわたりて、五千頭  
 の猛獸を殺せりといふ。毎年興



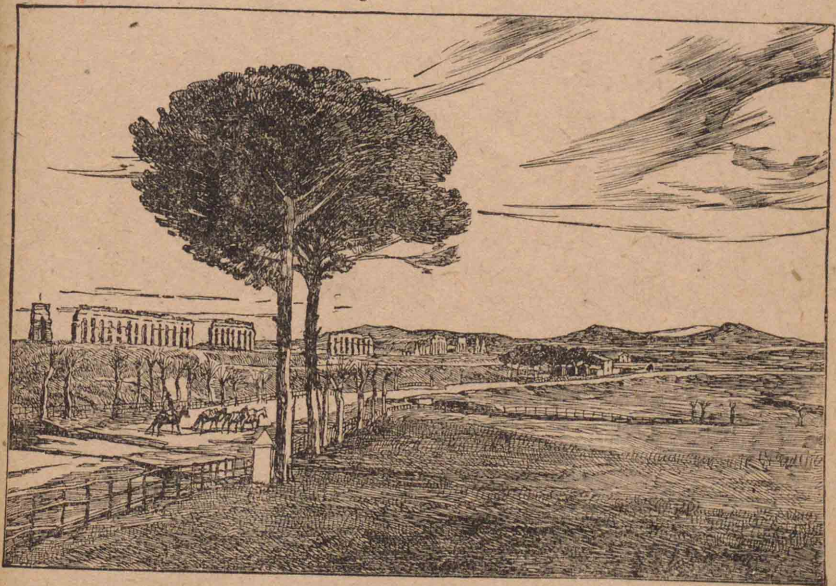
行の始るや、國民は狂喜して四方より來觀せり。中世諸國より來りし巡禮者等は此の壯大なる建造物に驚きて、

コロセウムの立てる限はとこしへにローマはあらん。コロセウムの崩れん時は諸共に都も絶えて跡なけん。ローマの市の亡びなば、人の世界も共にまたと歌へり。今や其の内部は悉く崩壞して、僅かに外壁の半ばを殘せるのみ。コロセウムを見るは月夜を最も良しとす。巨大なる周壁の一部は明光に照らされ、一部は暗黒に鎖され、各層幾百の窓漏る光を以て、縱横上下に明暗の紋様を織りなす壯觀實に名狀すべからず。

又驚くべきはカラカラ帝の浴場なり。古代ローマ人は入浴を好み、到る處に浴場を設けたりき。なかんづくカラカラ帝の造れる浴場は其の最も廣大なるものにて、千六百の浴席あり。浴室の外、圖書室、談話室、化粧室、游泳場、遊戯場、庭園等の設ありき。今は唯大理石もて張れる床の一部と其の周壁の一部とのみを存すれども、附近に散亂せる大理石の彫刻を以て見るも、室内の裝飾の如何に華美を盡くしたりしかを知るべし。ローマの郊外カンパニヤの平原をアルバ山の方へ通ずる一條の廣き道路あり。昔は繁華なる街道にして、勝誇りたる猛將勇士の意氣揚々として、アジャより、アフ



リカより、市民歡呼の聲に迎へられてこゝに凱旋せしなり。此の道と殆ど並行して、高架水道の殘礎あり。蜿蜒として原野をわたりて、遙かにアルバ山に向へり。其の壁の高き處は二十メートルに及ぶ。カラカラ帝の浴場も其の水を此の水道に仰ぎしなり。野邊の千草の霜枯れて、滿目蕭條たる時、アルバの山の端を



出づる月の靜かに殘墟を照らすを見れば、誰か俯仰懐古の情を禁ぜんや。

第二十六課 大樹

森の好きを私は、此の夏輕井澤の落葉松の森の中に小さい家を建てて、得意になつてゐた。どの窓から眺めても、見渡す限の草と木、其の末は遠山に連なつてゐる。これで大いに詩囊が肥えるくらゐのつもりで、内心頗る滿悦してゐると、ロンドンの本屋に頼んでおいたグレイ卿の自叙傳が届いた。それを開いて挿繪を見て、あゝ、やはりだめだと嗟歎した。其の挿繪といふのは、銀の樅と題して、グレイが自分の



家の庭の大樹の下に立つてゐる寫眞である。其の樅の木は百二三十尺もあるであらうか、私は其の寫眞を見て、或莊嚴な感じに打たれた。千年の風雨に打たれた高い木が、すつくと青空にそびえてゐる姿を見ると、頭の下るやうな氣がする。子供の時から斯ういふ大樹の下に生ひ立つたから、グレーにはあのやうな悠揚、迫らざる風格が出来てきたのだ。私はさう思つた。さうしてそよ風に揺れる低い落葉松の姿を、寂しい心持で眺め渡した。斯ういふ木を毎日見てゐたのではだめだと思つた。

私はイギリスに遊ぶ毎に、一木能く森をなすやうな大きい樅の木を、汽車の窓から眺めて感歎する。あゝいふ樅の古木を眺めながら、イギリス人は生ひ立つてゐるのだ。私は又オランダのヘーグ郊外にある大森林の菩提樹とぶなの雄姿を忘れることは出来ない。イギリスに先立つて議院制度を世界に示したオランダ、あのヨロップの一角で、孤壘に據つて新教と民權を擁護したオランダだけに、やはり大樹を保存し、讚美することをお忘れなさい。パリ郊外のフォンテーヌブローの森も壯大だ。アメリカ合衆國ではニューイングランドの榆の木、蒼空に迫る老樹を打仰ぎながら、私はよく初代植民人の心意氣を想望した。



北京の町では、雄大な槐まんじゆの木が遊子の魂をとらへる。蘇東坡が三槐堂の文中に、王祐が大樹を庭に植ゑて、子孫に偉人の出ること待つた心持を歌つて、王城の東、晉公のいほりせるところ、鬱々たる三槐、これ徳の符。あゝ、よいか。な。といつたのも同じ心であらう。老樹を崇むる心は、人の世の悠久を思慕する心である。限なく天に向つて伸びゆく巨木の姿には、紛々たる眼前の得喪を忘れしむる威容がある。斯かる大樹を多く保存する國民のみが、千波萬波起伏重疊する治亂興亡の外に立つて、久遠の生命を保存するのであらう。社會問題といひ、時代思想といひ、經濟政策といひ、それ等一切の現實問題

の根柢には、大地にどつかと根を下し、大空にすつくと伸上る大樹の力が無くてはならない。

斯く大樹を讚美する情操を抱いた私は、つい先頃高知縣に遊んで、長岡郡大杉村の山腹に生えてゐる日本の巨杉を見た。樹幹二百尺、亭々として雲に入る此の大杉は、二千年の齡を重ねてゐるといふ學者の推定である。そこに日本國民の運命の暗示を見たやうに、私は嬉しかつた。さうして私は五十鈴川のほとりに立ち並ぶ莊嚴な杉の林を思ひ浮かべた。それはいろくゝの意味で日本國民の象徴である。(經濟隨想 所載鶴見祐輔ノ文ニ據ル)

## 第二十七課 關稅



國富を増し國民の生活の資料を充實せしむるには、外國と貿易して有無互に相通ずることが必要である。外國と貿易をなすに當り、輸出入の貨物に對して課する租稅を關稅といひ、開港場國境等に稅關を設けて之を徵收するのである。もつとも今日では、各國ともに輸出を獎勵するため、輸出品に對しては稅を課さないから、關稅とは單に輸入品に課する稅と解してもよい。さうして輸入貨物は一般に關稅を加算した價格で販賣せられるから、關稅は其の貨物の消費者が之を負擔することになるのが常である。

關稅には、内國の消費稅と權衡を保つために課する場合と、自國の産業を保護するために課する場合がある。前者にあつては、低率の稅を課するを常とするが、後者にあつては、内國の生産品と競争すべき外國品に對し、其の輸入を防止する必要から、高率の稅を課することが多い。之を保護關稅といふ。

國民の生活必需品に關稅が課せられるときには、自然國民の生活費が増加することになるわけである。又工業の重要な原料品であつて、我が國に生産しないもの、又は生産の乏しいものに課せられるときには、工業の發達を妨げることになる。されば此の種のものに對しては、關稅を課さないか、或は低率の稅を課するやうに



しなければならぬ。

又國民が國産品を愛用せず、徒に外國品を尊んで之を用ふることが多いと、輸入が増加して、外國へ支拂ふ金が多くなる。殊に外國製の奢侈品、贅澤品を用ひるやうなことは、國民として最も慎むべきことである。我が國では斯ういふ品物に重税を課し、其の消費を抑制せんとしてゐるのである。

關税には、煙草のやうに價格によつて税率を定めるものと、米や酒類のやうに重量又は容積などによるものがある。前者を從價税といひ、後者を從量税といふ。

第二十八課 曾國藩

清朝創業以來、こゝに二百年、綱紀漸く緩みて内外多事、宣宗の末、遂にいはゆる長髮賊の亂起れり。

抑此の亂は、廣西の洪秀全といふ者、名をキリスト教に假りて愚民を惑はし、之を煽動して事を起ししに始る。もと一地方の暴動に過ぎざりしも、官軍微力にして容易に之を平定すること能はざりき。宣宗歿して文宗立つに及び、新に將を派して力を征討に盡くさしめしが、賊勢漸く盛にして、遂に天下の大亂となれり。

一代の英傑曾國藩の蹶起したるは、實に此の時なりき。國藩は湖南湘郷の人、もと文官にして、軍事は其の職とする所にあらずしが、たまく親の喪にあひて郷里



に在るや、賊を討ずるの詔を受く。國藩慨然として志を決し、身を挺して征討の事に従ふ。すなはち郷兵を募り

て新に軍を組織し、又揚子江の上流に水軍を設け、水陸相應じて賊軍を掃蕩せんとす。



當時賊軍は既に揚子江をさかのぼり、武昌を抜き、九江を破り、沿江の郡縣悉く其の手中に歸せり。官軍死力を盡くして討伐に力むれども、蕩々たる洪水の如き賊勢を覆さんこと容易の業にあらず。國藩此の間に處し

てあらゆる艱難に堪へ、惡戰苦闘十二年、穆宗の同治三年に至りて遂に賊亂を平定せり。

斯くて天下は平靜に歸したれども、時勢は既に變じ、積弊漸く著れ、清朝の基礎危からんとす。國藩思へらく、此の時に際して斷然舊習を改め、國政の革新を行ふにあらずんば、再び内憂の起らんこと期して待つべきのみと。こゝに於て親しく穆宗に謁し、兵馬の權を收め、財政を整へ、官吏登庸の法を改むる等の議を奏上す。此の奏議は眞に時弊に適中せる卓見にして、若し穆宗之を容れ、改革を斷行せんか、清朝の運命は必ずや今日我等の見る所と異なるものありしならん。



彼又當時に於て、早くも歐米の新文明を採るの必要を知り、留學生を各國に派遣して、海外の文化を輸入し、西洋の方式にならひて新に造船造兵の業を起せり。國藩は斯くの如く武人として經世家として絶世の手腕と非凡の見識とを有せしのみならず、又學者として徳行家として實に稀有の人物なりき。彼の部下より起りて名を一世にほしいままにせし人傑李鴻章が、彼を評して諸葛亮司馬光に勝れりといへるも、溢美の言にはあらざるなり。

## 第二十九課 峠の茶屋

「おい」と聲をかけたが、返事が無い。

軒下から奥をのぞくと、すゝけた障子が立て切つてある。向側は見えない。五六足の草鞋が寂しさに底からつるされて、屈託げにふらりと揺れる。下に駄菓子箱が三つばかり並んで、側には小錢が散らばつてゐる。

「おい」と又聲をかける。土間の隅に片寄せである白の上にくれてゐた鶏が、驚いて目をさます。くゝくゝと騒ぎ出す。敷居の外に、竈が今しがたの雨にぬれて、半分程色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜が掛けてあるが、土の茶釜か銀の茶釜かわからない。幸ひ下はたきつけてある。







らはばあさんの顔が殆ど眞向に見えたから、あゝ、美しいと思つた時に、其の表情はびしやりと心のカメラへ焼き附いてしまつた。茶店のばあさんの顔は、此の寫眞に血を通はした程似てゐる。

「おばあさん、此處をちよつと借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「あいにくなお天氣で、さぞお困りでござんしよ。お、お、大分おぬれなまつた。今火をたいて乾かして上げましょ。」

「其處をもう少し燃しつけてくれ、ばああたりながら

乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、唯今たいて上げます。まあお茶を一つ。」

と立上りながら、「しつ／＼」と二聲で鶏を追下げる。こゝこゝと驅出した鶏は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて、往來へ飛出す。雄の方が逃げる時、駄菓子の箱の上へ糞をした。

「まあ一つ。」と、ばあさんは何時の間にか剝拔盆の上に茶碗を載せて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一筆書きの梅の花が三輪、無雜作に焼き附けてある。

ばあさんは袖無の上からたすきを掛けて、竈の前へうつくまる。自分は懷から寫生帖を取出して、ばあさんの



横顔を寫しながら話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。こゝらは夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「あいにく今日は………さつきの雨で何處へか逃げ

ました。」

折柄竈の内がぱちくくと鳴つて、赤い火がさつと風を

起して、一尺餘り吹出す。

「さあ、おあたり。さぞお寒かる。」

といふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながらに、

微かなあとをまだ板庇にからんでゐる。

「あゝ、好い心持だ。お陰で生返つた。」

「いゝ、工合に雨もはれました。そら、天狗岩が見えます。」

曇りがちな春の空を、もどかすとばかりに吹拂ふ山嵐

の思切よく通り抜けた前山の一角は、未練もなくはれ

盡くして、老婆の指さす方に、あらけづりの柱の如くそ

びえるのが天狗岩ださうだ。(夏目金之助「草枕」ニ據ル)

第三十課 國語と愛國心

高潔勇健なる大和魂と相待ちて、古來我が國民の共同

團結を固うしたるものは、純正溫雅なる日本語なり。日



本語は即ち日本國民の間に流るゝ精神的血液にして、日本民族は此の精神的血液によりて統一せられ、此の最も鞏固にして且永遠的なる連鎖の爲に散亂せざるなり。されば一朝國家の大事あらんか、日本語の響く限り、幾千萬の同胞は、共同一致直ちに難に赴き、あくまでも力を盡くして、死して悔いざるなり。若し又慶報に接せんか、北の果も南の端も、一齊に君が代を歌ひて、國家の幸運を祝福するなり。

日本語は又我等日本人の慈愛深き母なり。我等の生まるゝや、此の母は我等を其の膝の上に迎へ取り、懇に國民的思考力と國民的感動力とを教ふるなり。此の母の慈愛や誠に天日の如し。いやしくも此の國に生まれ、此の國民たり、此の國民の子孫たるもの、誰か此の光を仰がざるべき。

國語には、我等が心中に一日も忘れかぬる生活、殊に人生の神代ともいひつべき小兒の頃の記念を留む。我等が幼かりし頃、終日の遊に疲れ果てて眠に就かんとせし時、母君は如何に優しき聲にて寢よとの歌を歌ひ給ひしか。頑是なき子供心にあるふざけなどして遊び廻りし折、嚴しき父君は如何に嚴かなる教訓を垂れ給ひしか。さては秋の山路に分入りて餘念なく栗の實を拾ひたる、あるは春の麗かなる野邊にれんげさうなどを



摘歩きたる、總べて其の當時より用ひ來れる言語は、當時の人名、當時の地名と共に、えも言はぬ快感を我等に與へずんばやまず。

次には學校にての言葉、職業により、身分により、地方によりての言葉等、皆それらの生活を其の上に反映す。顧みて過去の生活を思ひ、目のあたり現在の幸福を思ふ時、何人も此の言語の恩澤を蒙り、此の言語に感謝の意を表せざるはなかるべし。

國民が其の國語を尊ぶことは一種の美德にして、偉大なる國民は必ず其の自國語を尊び、情の上より自國語を愛し、理論の上より其の保護統一に従事し、以て國民

の愛國心を養成せんことを力む。

凡そ何れの國を問はず、いやしくも國家の觀念の上より、其の一員たるに恥ぢざる人物の養成を以て教育の目的とする以上は、先づ其の國の言語、次に其の國の歴史、此の二つをないがしろにしては、決して其の功を收むること能はず。これ國民たるものの須臾も忘るべからざる事なり。(上田萬年國語のためニ據ル)

高等小學讀本 卷四 終



昭和十五年七月二日  
昭和十五年七月四日  
昭和十五年七月五日  
昭和十五年八月六日

修正印刷  
修正印刷  
翻刻發行  
翻刻發行

高等小學讀本卷四  
臨時定價 金拾貳錢

著作權所有

著作兼  
發行者

文部省

昭和十五年七月六日  
文部省檢査濟

發行所

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地  
東京書籍株式會社  
翻刻發行  
兼印刷者 代表者 井上源之丞

印刷所

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地  
東京書籍株式會社工場

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

東京書籍株式會社



右島縣山泉郡吉坂村国民學校  
高二 栗栖正介